

さ……ああ私には、この世においてこれ以上に美しい姿があるとは思われないのです。

皆様、きょうもどうやら、みちのくに静かな夜がふけて来たようです。一日の夜に、私たちはやがて来る人生の夜を思い出しましょう。生きるということはきびしいことです。中でもひとりの夫がひとりの妻を^{いた}り続け、ひとりの妻が生涯かけてひとりの夫を愛し抜くということは、至難なことかもしれません。けれども、欲情のおもむくままに、次から次へと絶対に満たされることのない愛欲の対象を求めてさまよい歩き、ついに、身も心も疲れ、なえ果てた淋しい人生の末路を迎える愚かさには比べたら……。

皆様、生きるということはきびしいことです。けれど、その「きびしさ」の中にこそ、人間としての誇りと喜びとがみなぎるのです。

私には、いつの日にか心の底から、しみじみとした喜びをもって口ずさみたい一つの言葉があります。いつか皆様と共に、この一句を口ずさみ得たらと思います。それは

「年をとるということは、楽しいことだ！」という一句であります。

では皆様、おやすみなさい。

第四話 理解しあういのち

皆様は、こんな日本の古い話をご存じでしょうか？ ある所に、隣りあわせの二軒の家がありました。その一軒には、子供のない中年の夫婦が住んでいましたが、どういうわけか、その夫婦の間にはけんかの絶えたことがありません。ちょっとしたことが原因となつては、互いに口汚くのしりあつて不愉快な日々を過ごしているのです。ところが、その隣りは大世帯で、若夫婦に子供がふたり、それにお姑までが加わった大家族ですが、不思議なことには、その家からは、未だかつて口げんかの声らしいものの漏れるのを聞いた人がないのです。いつ行っても一家こぞってニコニコと、いかにもしあわせそうなありさまは、夫婦げんかを日課のようにしている隣りの夫婦者には、真に理解し難いなぞでした。そこである日、隣りの家へ出かけて行って、いったい、どうしてたくさん家族が毎日毎日けんか一つしないで暮らして行けるのか、その秘訣を教えてくださいました。隣りの若主人はニコニコ笑つて、

「ああ、そのことですか。それはなに、ちっとも不思議なことではないのですよ。あなたのお家

「ここ三回にわたって、私は『愛情』という問題についてお話して来ましたが、もう一言愛情ということに補足しておきたいと思えます。私は、最初の時に、愛とは許しあうことと忍びあうことだと申しましたが、さらに、愛とは、互いに理解しあうことでもあると言いたいのです。よく、『今の若いものの気持がわからない』とか『私の夫は私を理解してくれない』などの言葉が使われますが、一体、理解するとは、どういうことなのでしょう。

世の中には、どこから見ても欠点一つない完全無欠にでき上がった人間というものはありませんし、また、何もかも悪い面ばかりで、徹底的に悪人だという人も、ほとんどありません。ですから、彼は悪い奴だ、だから彼の行いは全部悪で、彼の考えは全部まちがいだ、彼の言葉は全部嘘だとひとりぎめすることはよくないことです。確かに、だれが見ても仕様のない、救いようのない人間と思われる人があります。けれども、なおかつ、その人も、どこからどこまでが全部悪いということはあり得ないことなので、その人にも、どこかに善い面が……すばらしい性格が——知力や才能の方面ではなくても——人間としての素質の中に何かの善さが必ずあるはずなのです。問題は、私たちがそれをみつつけようと努力するか、否かにかかっています。たとえば、しょうのない人間だと思われている人が、よく気をつけてみると、自分より弱い人間には最後までめんどろを見てやるとか、どんなことがあっても友だちを裏切るようなことは絶対にし

に夫婦げんかが絶えないのはおふたりとも善人だからです。私のところにけんかがないのは、私たちみんなが悪人ぞろいだからです。」

と答えました。隣りの主人が驚いて、善人ばかりの家にけんかがあって、悪人ぞろいの家にけんかがないとはいったいどういうことですかと尋ねますと、若主人が答えて、

「まあ、仮に私が座敷の真中に出してあった湯のみ茶わんに気がつかないで、うっかり足にひっかけたのでしょうか。私は、ああ、これは私が不注意で悪かったと申します。すると私の家内が、『いや、あなたが悪いのではありません。早く片づけなかった私が悪いのです。』……と言うと、私の母がそばから口を出して、『いやいや年寄りの私がそばにいながら注意してやらなかった私のあやまちなんだよ。』と申します。みんなが進んで悪者になろうとするのです。けんかをしたくても、これではできないじゃありませんか。ところで、お宅でしたら、おふたりは、そんなとき、どのようにおっしゃいますか？」

と言われて、隣りの男は、フーム、なるほどそうでしたかと合点がいったというお話です。

たいへんに古臭いお話を申し上げて失礼しましたが、案外、こんなところに、つい見逃しやすい大きな真理がひそんでいるのではないのでしょうか？

ないとか、案外な美点が——発見しようと思う人には発見できるものなのです。だれももちろん、悪そのものを愛することはできませんが、悪い人だと思われている人の持つ「美点」を愛することはできません。その善さを見出し、それを尊敬し、それを愛することが、すなわち、その人を理解することなのです。

お子さんをたくさんお持ちのご両親で、どうしてあんな子供ができたのだろうかと思議られるような、学校でも近所でも、いつも問題になる、いわゆる「問題の子供」をお持ちの方がありませんか？ もし、ありましたら……だれの子でもない、あなたご自身のお子さんです。必死になって、祈りながら、謙虚な気持ちで、そのお子さんの美点を捜し出してください。必ずあるはずです。そして、それを、あたかも貴重な宝石のように尊重してあげてください。「世の中の奴等が全部僕を嫌っても、僕のお父さんとお母さんだけは、僕のことをわかってくれているんだ」という、ほのぼのとした自覚が、お子さんの胸の中に湧き出て来るなら、もう、お子さんは救われているのです。いや、救われているどころか、そのお子さんの人生の完成を指して、強い第一歩が踏み出されていると言っているのです。

ところで、第二の点に入りますが、人間として徹頭徹尾悪人だという人がないと同様に、ある人の意見や考え方、その主張というものも、それが少くとも何人かの共鳴者を持つ以上は、徹底

的に全部がまちがいであるということも少ないものです。どこかに真実があり、どこかの一点に傾聴すべき点があるはずなのです。

それと全く同じわけで、自分の意見が正しいと確信する人も、何人かの人が自分の意見や主張に反対するならば、自分の意見のどこかに誤りがあるか、少くとも説明し足りない点があるので、はなからうかと反省して見る必要があるわけです。自分の意見はすべて正しく、それに反対する他人の主張はすべてまちがいだときめつけることは、正しいことでもなければ、また賢いことでもありません。

生活の態度や、あるいは、意見、主張を異にしているさまざまな人々が一緒にあってこの世の生命ができ上がっている限り、いつも他人の主張の中の真実に耳を傾け、自分の意見のまちがいを謙虚に認めるだけの、心のひろさと素直さを持って生きているでないならば、平和な世界というものは望むべくもありません。

私はこの時間の放送では、政治に関しては語らぬつもりですが、今度の勤務評定に関する政府と日教組との争いは、それが、「教育」という精神的な仕事の場を中心としているものでありますので、私にも一言、言いたいことがあります。

政府は、他のすべての公務員に勤務評定が実施されているのだから、同じ公務員である学校教

うちに、始めて教育という業ができ上がると私は考えています。そのような教師自身の内面的な人格の力量は外部からは評定され得ない世界であるはず、それをただ、国鉄の職員なりに評定しようというところに、私は勤務評定実施の不合理を見るような気がいたします。従って、私は、それに反対を唱える人々の立場が理解できるように思われるのです。

が、それと同時に、私は、勤務評定に反対する教育者の立場を理解するからこそ、今度の日教組の人たちがとった反対のための手段、その方法を私は悲しい気持ち、なにか裏切られたような気持ちで見つめざるを得ないのです。さきほども申しました通り、教育とは、各教師が担当する学科を通じて児童の人格の形成を目指すものであるはずで、そして、人格形成の素材となるものは、理知の琢磨と、情操の陶冶……言い換えたなら、真理と愛とであります。たとえいかなる理由があろうとも、人間の内面的生命が、憎しみや恨みによって成長するものではないことを、私は、はっきりと断言いたします。人間性を豊かに実らせ、人の住む世界を地上のパラダイスにする唯一の方法があるとすれば、それは憎しみではなくて愛であり、戦いではなくて許しであり、敵の野望をあくまで粉碎することではなくて、互に話しあう場を持ちつつ理解しあっていくことです。

師にも、この法律があてはまるのは当然であるという立場をとっているようでもあります。けれども、鉄道の職員や官公庁の事務員たちのしている仕事と、学校教師が果たしつつある教育という仕事との間の根本的な相違が見逃されているのではないかと私は恐れています。一般の職域において、仕事というものの本質は、あらゆる意味を含めて「能率」という一本の線にしばられてきます。それは外部に現われた世界であり、外面の「はかり」ではかれる……すなわち評定され得る次元の世界なのです。もしも教育ということを、単に知識の伝授、その切り売りと考えれば、同じ次元に属しましょうが、私は教育というものを、全く別の世界、次元を異にした世界の労作と考えています。一例をとるならば、生物学の教師は、一本の植物を教材にするとき、その植物の類別と名称、あるいは、その成長の過程、その内部構造の分析などを教示しましょう。それだけならば、その教え方のじょうずへたや授業への熱意、出席状況などが評定の対象となりましょうが、少くとも小中学校の児童の教育ということは、それ以外に児童の人格の形成が織り込まれていなければならぬはずで、従って一本の植物を教材にした場合、先にあげました事柄以外に、児童をして、一つの可憐な植物の中にひそむ生命の神秘に触れさせ、そこに驚きを感じさせ、生命というものの限りない尊さとその恩恵へのしみじみとした感謝を覚えさせることができねばなりません。いわば、教師の人格と児童の人格との火花を散らすような激しい接触の

皆様、今や世界は、国と国とが、民族と民族とが、憎悪と疑心暗鬼の中に、こんとんと渦巻いています。せめて狭い四つの島にひしめく九千万の私たち日本国民は、祖国を一つにする「はらから」として、もっと理解しあい、和みあっていけないものでしょうか？

私は日本の国が、そこに住むひとりひとりみんな、自分こそが悪いのだと謙虚におのれが足りなさを見つめ得る、悪人ぞろいの国になって欲しいと心の底から祈らざるを得ません。

夏の夜がふけて来ました。夜のしじまは反省の時です。ひとりひとりの深い反省と悔悟の中に、また明かるい希望の朝が訪れますように。

では皆様、おやすみなさい。

第五話 孤独を凝視めて

今から十五、六年も昔のことになりました。私が大阪にいたころのある日のことです。突然見知らぬひとりの婦人の訪問を受けました。けれども、会って話しております中に、見知らぬとは言いながら、私は、その婦人の名前を新聞などでしばしば耳にしていたことを思い出しました。その婦人というのは、当時、関西では相当に名の売れた舞踊家だったのです。年のころは三十もすでに半ばを越していたと思いますが、売れっ子の自信に満ちたはつらつたる気構の女性でありました。その有名な舞踊家が私を訪問したわけを尋ねようとしますと、それより先に、彼女自身問わず語りに次のように話してくれました。

「私は舞踊家なのですが、こんなに生きがいのある仕事は他にないと思います。この次にはあれを演じ、その次にはこれをひろうし……と公演の出物の構想を練るのですが、すばらしいヒントをインスピレーションのように思いついた時の喜びは、口では言い表わし得ないほどです。ところできょうお伺いしたのは、ちょっとお願いがあったことなのですが、実は、いつか近い